



注文の多い料理店（26）

「そうそう、ぼくは耳には塗らなかつた。あぶなく耳にひびを切らすとこだつた。ここのはじつに用意周到だね。」

「ああ、細かいとこまでよく気がつくよ。ところでぼくは早く何か食べたいんだが、どうも斯うどこまでも廊下じゃ仕方ないね。」

するとすぐその前に次の戸がありました。



注文の多い料理店（27）

「料理はもうすぐできます。

十五分とお待たせはいたしません。

すぐたべられます。

早くあなたの頭に瓶の中の香水を
よく振りかけてください。」

そして戸の前には金ピカの香水
の瓶が置いてありました。

二人はその香水を、頭へぱちや
ぱちや振りかけました。

ところがその香水は、どうも酢



注文の多い料理店（28）

におい

のような匂いするのでした。

「この香水はへんに酢くさい。どうしたんだろう。」

「まちがえたんだ。下女が風邪でも引いてまちがえて入れたんだ。」

二人は扉を開けて中にはいりました。

扉の裏側には、大きな字で斯う書いてありました。

「いろいろ注文が多くてうるさか



注文の多い料理店（29）

ったでしょう。お気の毒でした。
もうこれだけです。どうかからだ
中に、壺の中の塩をたくさんよく
もみ込んでください。」

なるほど立派な青い瀬戸の塩壺
は置いてありましたが、こんどと
いうこんどは二人ともぎよっとし
てお互にクリームをたくさん塗っ
た顔を見合せました。
「どうもおかしいぜ。」



注文の多い料理店（30）

「ぼくもおかしいとおもう。」

「沢山の注文というのは、向うが
こっちへ注文してるんだよ。」

「だからさ、西洋料理店というの
は、ぼくの考えるところでは、西
洋料理を、来た人にたべさせるの
ではなくて、来た人を西洋料理に
して、食べてやる家うちとこういうこ
となんだ。」

つづく